日中の歴史認識の差小考

大　沼　正　博

はじめに

一部の日本人の日中戦争時期の歴史についての不用意な発言が，しばしば物議をかもすのは周知のことである。その背景には日本側と中国側の歴史を見つめる姿勢の相違がある。中国の歴史認識の実態を知るために，日本を公式訪問した際の中国の江沢民国家主席の発言と，中国の小学校で使用されている歴史教科書を検討することを通じて，日中間の歴史認識における温度差について若干の考察を加えてみたい。

江沢民発言に対する反響

1998年11月26日から始った，中国国家主席江沢民の訪日は，その全期間を通じて，歴史認識の問題をことあるごとに強調したために，日本側を白けさせ，反発すら生じさせて，この意味で失敗であったという評価もされるようである。そのあとで行なわれた意識調査では，日本人の中国に対して抱く印象が悪化したとも伝えられている。この訪問について矢吹晋は「日中関係の冬――春遠からじ」(1) という文章の冒頭で，

> 江沢民国家主席の日本訪問は，あえて率直に言うが，大失敗に終わったと評すべきであろう。問題は，外交交渉レベルの経緯や妥協点にあるのではない。日本の人々の心に不快きわまりない「中国冷え」現象をもたらした事実を直視しなければならない。

と述べている。さらに矢吹は，

大方の日本人は……比較的健全な眼で中国を見てきたといってよい。今回の出来事は，そのような善意の日本人に大きな衝撃を与え，中国脅威論を振り回す右寄りの人々を喜ばせる結果を招いた点で失敗なのである。味方を敵に回し，敵を喜ばせるほどまずい外交はない。この種の日中関係の摩擦を全世界に示すことが中国にとってどれほどの利益になるのか，これもきわめて疑わしい。中国から見ても，おそらく訪日が成功とはいいにくいのだ。

と指摘している。

読売新聞論説委員の高井潔司は，「現状を直視できない中国，歴史を直視できない日本」(2) という文章を次の言葉で書き出している。

「中国元首として有史以来初の来日」と注目された江沢民国家主席の訪問は滞在中，中国侵略に対する日本の反省，謝罪が不十分であるとの趣旨の発言を繰り返したため，日本の対中世論を悪化させる結果となった。当面，関係の冷えこみは避けられないだろう。局面の転換には，今回の訪問で締結された長期的対話の枠組である「友好協力パートナーシップ」の精神に立ち帰ることだ。

そして高井は98年11月25日付の『日本経済新聞』の記事を引用して，彼の感想を述べている。

「二十四日までの両国の協議の結果，日本国憲法に基づく平和国家としての日本の発展と中国の改革・開放政策を相互に評価する内容が固まった」

この記事を読んで，私は「わが意を得たり」と喜んだ。というのは，以前から私は現状評価こそ根本的な問題であって，歴史問題でぎくしゃくするのは，実は現状に対する不信感，警戒感（例えば大国化を軍国主義復活であるとか，脅威であると決め付ける現状認識）が背景にあり，歴史問題を，現状に対する牽制の材料として，利用していると指摘してきたからだ。日経の記事を読んで，ようやく当局者も現状評価に踏み込んできたか，これで長期的な対話の枠組みも可能になるだろう，と感じたものだ。

しかし，高井の期待は裏切られてしまった。それは「現状認識と歴史認識が相打ち」になったからだという。高井は29日付の『朝日新聞』の記事を

引いてこの間の説明を加える。24日夕の外相会議で，小淵首相がおわびを口頭で述べ，侵略は文書（共同宣言）に書き込むことを，高村外相が切り出した。唐家璇中国外相は拒否せず，江沢民主席の意向を確認したいとして即答を避けた。ちなみに，唐外相はこのとき「江主席とは世代が違うのでこれでいいかどうかわからない」と発言したという。「つまり，日本側の最後のカードを拒否したのは江沢民だった」と高井は断定している。そして，この記事の重要部分として以下を引用する。

（こうして）「おわび」が文書に入らない見通しとなり，日本が求めていた「中国側が戦後の日本が平和国家としての道を堅持してきたことを高く評価する」という記述は文書から削られた。

このように見てくると，江沢民主席の訪日を失敗と考えているのは，中国に敵意や反感を持ったり，中国の揚げ足取りに狂奔している人々ばかりでないことが明白になるだろう。もっとも，反中国や揚げ足取りの立場には，失敗であれなんであれ，「評価」などというもの自体が存在しないかも知れないのだが。

歴史認識への言及

さて，たとえば矢吹や高井の評価，あるいは否定的な意見が強いといわれる一般の評価が，果たして妥当なものなのかどうかを見極める手がかりとして，件の江沢民の訪日期間の歴史認識への言及が，実際にどの様な場面でどういう表現でなされたのかを具体的に見てみよう。ここでは主として中国共産党中央委員会の機関誌『人民日報』(3) の記事から実例を挙げることにする。かなり冗長な引用になるだろうが，繰り返しによるくどさを実感するには，その雰囲気にひたることも必要であると考え，あえて詳細に例を拾ってみよう。

11月26日の「円満に訪ロを終え日本への公式訪問を開始　江沢民主席東京に到着」では，空港での書面講話で，「中日関係の歴史的経験をまじめに総括することは，未来の両国の友好協力の発展に重要な意味を持つ」と言ったと，まず最初の言及について報じている。

27日の「江沢民主席日本首相小淵恵三と会談を行なう　日本政府中国

侵略の歴史について再度反省とおわびを表わす」はかなり長い報道である。

「近代，日本軍国主義は中国人民に深刻な災難をもたらした侵略戦争をなんども起こした。率直に言って，多くの列強の中で，日本は中国にもっとも重大な被害を与えた国である。しかし，われわれは侵略戦争の責任は軍国主義分子が負うべきであって，広範な日本人民も同じく被害者であり，彼らと仲良く交際し，代々の友好を発展させるべきだと一貫して主張している。この既定の政策は変わることはない。しかし，歴史問題で前向きの態度をとるには，その前提として歴史を正視し承認しなくてはならない。」

「日本国内には歴史問題について騒動を起こし，歴史事実を否認し歪曲すらする人がたえずいることを，遺憾ながら指摘しなくてはならない。これらは中国人民を含む戦争被害国の人民の感情を大きく傷つけ，中日関係の正常な発展を妨害する。中国側は歴史の真相と中日関係の政治的基礎を守るという大局から，必要な対応をせざるをえない。」

「日本軍国主義の横行は中日両国人民に災難をもたらし，また中日の伝統的な友好関係に重大な損害を与えた。軍国主義は中日両国人民の共同の敵であり，人類の平和と進歩に完全に背く歴史の逆流であって，両国人民は共同して決然と反対すべきである。日本政府がこれに対して明確な態度をとることは，第一に日本が平和発展の道を堅持し続けることに有利であり，また中国を含む周辺の隣国の理解と信任を得られるであろう。」

「歴史問題をきちんと解決する鍵は日本自身にある。日本政府がこの方面の経験と教訓をまじめに総括し，歴史を否認し歪曲する勢力をほんとうに阻止できることを希望する。」

同じ27日の「平和と発展に尽力する友好協力関係の建設についての共同宣言を中日が発表」という記事では，四項目の副見出しがあげられているが，うち二つはそれぞれ，「歴史を正視することと正確に歴史を認識することは中日関係を発展させる重要な基礎であると双方は認めた」と「日本側は過去の中国に対する侵略が中国人民にもたらした重大な災難の責任を痛感し，これに対して深い反省を表わした」である。またこの記事では共同宣言の摘要が報じられているが，歴史認識の項目は以下の如くである。

「過去を正視することと正確に歴史を認識することは，中日関係を発展させる重要な基礎であると，双方は認めた。日本側は，1972年の中日共同声明と1995年8月15日の内閣総理大臣の談話を遵守し，過去の中国に対する侵略が中国人民にもたらした重大な災難と損害の責任を痛感し，これに対して深い反省を表わした。中国側は，日本が歴史の教訓を汲み取り，平和発展の道を堅持することを希望した。この基礎の上に，両国は永久の友好関係を発展させる。」

27日にはもうひとつ，「歴史を正視し，未来を構築する」という『人民日報』記者，徐宝康と于青の署名入り通信記事がある。前半は上述の内容と重なるが，後半には江沢民が日本の古い友人と家族に会見したことを紹介している。この場では彼らが期せずして歴史に正しく対処することを話したという。二階堂進は，「日本が過去を反省することはとても重要だ」と言い，安部晋太郎の息子安部晋三は，「正確に歴史を認識する基礎の上に立って未来に眼を向けなければならない」と言い，園田直夫人園田天光光は，「日本は正しい歴史観で彼ら（次の世代）を教育し，彼らに日中関係のあの不幸な歴史について正確な認識を持たさなければならない」と言った。これに対し江沢民が歴史認識に触れたとはとくに書かれていない。

ところで，同じ27日の『光明日報』は「江主席日本の古い友人とその家族に会見」という記事で，やはりこの会見を報じている。上述の二階堂進と園田天光光の発言も紹介されている。ただし，園田の発言のあとに，「江沢民は園田の見方に深く賛同した。彼は正確に歴史に対処してこそ，未来に向かい合うことができると言った。」と書かれている。つまり，江沢民はここでも歴史認識について言及していたのである。

28日の「江主席日本参議院衆議院議長歓迎朝食会に出席　　中日双方が歴史を鑑として未来を切り開くことを希望」では，「唐の太宗は『歴史を鏡にすれば，盛衰を知ることができる』と言った。中日双方が歴史を鑑として，未来を切り開くことを希望する」と言っている。

同じく28日の「小淵首相宴を設けて江主席を歓迎　　江主席，中日両国は歴史を鑑として，悲劇の再演を防ぐことによってのみ，永久の友好を発展させることができると強調」では江沢民の発言は以下の通り。

「前世紀末から今世紀中葉の50年間，日本軍国主義は中国侵略戦争をい

くども起こし，中国人民に巨大な損失を与え，また日本人民に悲惨な教訓を残した。」

「中日両国は歴史を鑑として，悲劇の再演を防ぐことによってのみ，永久の友好を発展させることができる。」

また同じ28日の「江主席日本の政党の指導者と会見　日本の各党の指導者がひきつづき政治家の卓見で高所から，両国関係の新たな発展のために積極的作用を発揮するよう希望」での，歴史認識への言及は以下のようであった。

「中日両国は一衣帯水の近隣で，世界の民族交流史の中で稀に見る悠久の友好の伝統を持つ。両国関係がまずく，対立さえしたのは，主に近代日本の軍国主義が起こした侵略戦争であり，中国人民はこれによって巨大な災難を蒙り，日本人民もその深刻な被害を受けた。」

「歴史は鏡であり，『過去を忘れず，将来の戒めとする。』中国側の中日関係の基本的な見方は，ひとつには歴史を正視し，歴史を鑑とすること，ふたつにはこの基礎の上に前向きの態度をとって，共同で未来を切り開く努力をすること。」

「正確な歴史観で青年を教育する必要がある。」

ちなみにこの時に会見した顔触れは，自民党の森喜郎，深谷隆司，池田行彦，民主党代表菅直人，公明党党首神崎武法，自由党党首小沢一郎，共産党委員長不破哲三，社民党党首土井たか子であった。このうち歴史認識に言及した四人の発言を記しておく。

菅直人:「日本は歴史問題についてはっきりとした，明確な認識を持つべきで，歴史について反省をした基礎の上に未来に向き合うべきである。」

神崎武法:「日中友好の基礎は日本が歴史について正確な認識を持ち，深刻な反省をし，軍国主義の道を歩まないことである。」

不破哲三:「歴史問題と台湾問題を正確に認識し対処する鍵は日中が関係を発展させるもっとも重要な基礎である。」

土井たか子:「中国人はいつも『過去を忘れず，将来の戒めとする』と言う。日本人も過去に対して目をつぶると，未来が見えないと言う。われわれはこの教訓をいつも心に刻んでいるばかりでなく，行動において実行しなければならない。」

さらにまた同じ28日には「江主席日中友好七団体の歓迎レセプションに出席　　講話を発表し，中日両国は仲良く交際してこそ，両国人民の共通の願いと根本的利益に合致すると指摘」の記事がある。前出の文章で高井潔司が，「江沢民は，日中友好七団体の歓迎レセプションの席でも，歴史問題をぶっている。友好団体に参加している人の多くは，過去の侵略戦争に，贖罪意識を持ち，その償いのため友好運動を続けている。この人達に対して，説教することにどんな意味があるのか。逆効果しかないだろう」と批判しているレセプションである。この席での発言を記す。

「しかし一時期の不幸な経歴もあった。当時日本軍国主義が起こした中国侵略戦争は，中華民族に重大な災難をもたらし，日本人民もその害を蒙り，中日関係は厳重な挫折に遭遇した。『歴史を鑑とすれば，盛衰を知ることができる。』われわれが歴史を忘れてはいけないと言うのは，古い歴史の勘定を清算しようとするのではなく，未来を切り開くためにいっそう堅固な基礎を打ち立てるためである。歴史過程の光明の面を見るとともに，曲折の一面も見て，ほんとうにその中から教訓を汲み取る，これこそがわれわれが持つべき正確な歴史観である。」

「新世紀がまもなく来ようとしている時に，われわれはさらに歴史を復習しなくてはならない。」

「歴史を正視し，歴史を鑑としなければならない。中日友好は両国人民の友好の伝統を受け継ぎ，過去のあの不幸な歴史に正確に対処する基礎の上に建設される。歴史を正視してはじめて，未来に向かってよりよく歩いてゆける。」

なおこのレセプションでは，日中友好七団体を代表して日中友好協会会長平山郁夫が歓迎の言葉を述べているが，その中で平山も歴史認識に触れているので，それを引用しておく。

「戦争の期間には，さらに日本の中国侵略の非常に不幸な歴史的時期を経験した。」

「このたびの江沢民主席の訪日を通じて，日中両国関係の歴史的経験と教訓とが総決算されることを，われわれは衷心より希望する。」

「歴史を正視し，未来に向き合う精神に基づいて，両国間に存在する問題，とくに歴史問題と台湾問題を適時適切にうまく処理するならば，日中

両国の関係はかならず持続し，安定し，健全に発展することができると，われわれは信じている。」

29日は日本記者クラブで行なわれた記者会見，これは江沢民の東京での公式行事の最後のものであったが，それを報じる記事，「江主席日本で記者会見を行なう　訪日の成果，中日関係と台湾問題等について記者の質問に答える」がある。ここで江沢民は「双方は中日関係の歴史的経験を全面的に回顧してまじめに総括し，歴史を鑑として，21世紀と向かい合い，平和と発展に尽力する友好協力関係の建設に同意した」と述べる。

新華社記者の質問への答では，「双方は歴史を鑑として，未来に向き合う精神に基いて」と，同様の発言をしている。

『読売新聞』[4]の記者の「歴史認識問題についてなんども話し，『過去を忘れず，将来の戒めとする』を強調している。あなたは日本に軍国主義復活の危険があると思うか。」という質問には，「中国の昔の人が『歴史を鑑とすれば，盛衰を知ることができる』と言った。歴史は客観的事実であり，改変することはできない。唯一の正確な態度は，歴史を正視し，その中から経験と教訓を汲み取り，そうすることよってよりよく未来に向き合い，未来を切り開くことだ。私が指摘しなければならないのは，日本国内ではいつも一部の人々が，地位の高い人を含めてつねに歴史を歪曲し，歴史[5]を美化し，中国人民を含むアジアの被害国の人民の感情を傷つけている，われわれはこれに対して対応せざるをえない。このことはまた，どのようにして正確に歴史に対処するかが，日本がこれまでしっかりと解決していない問題であることを明らかにしている。日本は歴史に対して責任を負う態度で，これらの人の誤った言行を阻止し，あわせて正確な歴史観によって青少年世代への教育と指導を強化することが，中日関係の永久の発展に有利であり，最終的には日本にとっても好都合であると，われわれは考える」と回答している。

11月26日に行なわれた首相経験者たちとの朝食会については27日の『光明日報』の報道，「江沢民主席日本の前首相のために朝食会を行なう」によって見てみる。

江沢民の発言は，「古人は『歴史を鑑とすれば，盛衰を知ることができる』と言った。中日両国間の交流は二千年余の以前に遡ることができる。

とくに今世紀軍国主義の侵略がもたらしたあの悲惨な歴史と中日関係がついには戦争を友好と化した曲折の歴程は，代々の友好という目標を実現するのにもっとも重要なことは正確に歴史を認識し対処することであることを明らかにしている」というものであった。

この江沢民の発言の前に中曽根康弘が首相経験者を代表した感謝の言葉がある。その中で中曽根は「村山元首相が1995年日本政府を代表して過去の歴史について反省とおわびを述べた講話はわれわれみんなの考え方を代表している，この基礎の上に21世紀に向かって両国の平和協力関係を建設することを希望する」と言っている。

また村山富市は，「われわれは『過去を忘れず，将来の戒めとする』ことに賛同する，歴史を正確に認識することは日中両国が信任を築く基礎である」と言った。

同じ26日の晩に開かれた天皇の歓迎宴での発言について27日の『光明日報』の報道，「日本天皇宴を設けて江沢民主席の訪日を歓迎」によって見る。江沢民は，「しかし不幸なことに，近代の歴史において，日本軍国主義が対外侵略拡張の誤った道を歩み，中国とアジアのその他の国の人民に大きな災難をもたらし，日本人民にも深刻な被害を与えた。『過去を忘れず，将来の戒めとする。』この悲惨な教訓を，われわれは永遠に記憶しなければならない。」と言っている。

早稲田大学における講演

前節での江沢民の発言の引用は予告通り非常に長いものになってしまったが，上述の目的のために主に『人民日報』の記事で目に付いたものを紹介した。なるほどかなり執拗に歴史認識について言及していたことがよく分かる。この経過を追体験してきたわけだが，ここでは江沢民の訪日期間中でのいちばん重要と考えられる発言について検討を加えてみよう。

江沢民が訪日期間中にみずからの主張をいちばんまとまった形で述べたのは，やはり早稲田大学での講演においてのことだった。その発言の形式と性格からいっても，内容の分量からいっても，そう断定することができよう。そこでやはり『人民日報』の報道によって具体的に見てみよう。講

演は11月28日に行なわれ，翌29日の『人民日報』が全文を掲載している。日本の報道によれば，聴衆は学生ら1000人で，講演のさなかに学生席で中国の核兵器反対などを叫んだ三人が取り押えられる一幕もあった。早稲田大学は名誉博士号を贈ろうとしたが，江沢民がこれまで外国の大学での講演で名誉学位を受けたことがないとの理由で，中国側が辞退したとのことである[6]。あるいはまた，その後しばらくして，聴衆の氏名等を大学側が警察に知らせていたことが発覚し，問題にされたことも記憶に新らしい。

さて，江沢民の講演の題目は，「歴史を鑑として，未来を切り開こう」であった。演題そのものからしてその言わんとするところをずばりと指し示しているわけだ。彼はまず「明かるい鏡は姿を映し，古い事から今を知る」という中国の古い言葉を紹介して，「世紀の変わり目の重要な歴史的な時に，深刻に過去を回顧し総括し，歴史の長い流れの中から有益な経験と前進する原動力を汲み取ることは，われわれが正確に未来を把握し，より良く未来を切り開くために，疑いもなく重要なことだ」と言う。

つづけて中日が一衣帯水の隣国で，二千年余の交流の歴史を持つ云云，という御定まりの話になって，鑑真，渡来人，遣隋使，遣唐使，吉備真備，阿倍仲麻呂から，平がな，片かなの創造にまで及ぶ。そして孫文や陳独秀，周恩来，魯迅，郭沫若，何香凝の名が挙げられて，日本への留学生が数万にのぼったことを言う。

しかし不幸なことに日本は軍国主義の侵略拡張の道を歩み，1894年の甲午戦争（日清戦争）となり，1930年代には全面的な対中国侵略戦争を起こして，中国の軍民の死傷者3500万人，経済損失6000億米ドル以上と言う数字を示す。

そして江沢民は国土の喪失と民族の危急存亡の苦痛をみずから経験した歴史の一証人として，この歴史の事実を若い世代に伝える責任があるとする。また多年にわたって中日友好に関心を寄せ支持してきた年長者として，戦後両国が敵対から友好へと変わる過程を目の当たりにして，平和友好の貴とさを深く知っているとする。

「中華人民共和国成立後，毛沢東主席はあの侵略戦争の責任はごく少数の軍国主義分子が負うべきもので，中国人民は日本人民と代々仲良くしな

ければならないと中国人民に教えた。」

「武力侵略し，他国の人民を奴役したり，自分の文化と生活方式を他民族に強制すると，かならず大きな災難をもたらし，かならず失敗するものである。」

「二千年来の中日関係史は，重大な曲折はあったが，善隣友好が主流だった。」

「中日関係史上に出現した，あの不幸な経歴を正視し，その中から歴史の教訓をほんとうに吸収しなければならない。『過去を忘れず，将来の戒めとする』。軍国主義を採れば，隣国に重大な災難をもたらし，国際平和と安全を危なくするばかりでなく，本国の人民をも危害に遭わせ，国力が甚しく衰退する局面を作り出すことを，歴史の実践が証明している。」

「日本の国益から考えても，アジアと世界の平和と発展の促進から考えても，日本は平和的発展の道を歩むことを堅持し，正確な歴史観で国民と若い世代を指導するべきであり，どんな形式の軍国主義思潮と勢力であってもあらたな抬頭を許してはならない。」

以上がこの講演での歴史認識への言及箇所である。伝統的な日中交流に触れているのは，この発言の形式と性格が然らしむるのであって，個人的な体験から結果する自己の歴史的役割についての自覚の表明を除いては，他の機会に語られている内容と同じであり，言葉遣いも一様である。

「中国冷え」現象

江沢民の訪日期間中の歴史認識についての発言を一通り眺めてきて，あらためて，拙論の最初に引用した矢吹晋が言うところの「不快きわまりない『中国冷え』現象」が，自分の心にもたらされたかどうかを確認しなければならない。率直に言うと，あまりそういう気分にはならなかった。つまり，中国熱を冷ましてしまった，いいかげんにしろ，と非難するほどの気分にはならなかった。たしかにいろいろの機会に何回も言及しているのは分かる。だから，繰り返し繰り返しよく言ったものだと感心はできるだろう。中には何回も江沢民の発言を聞かされた人もいるのかも知れないが，場が変われば座に居る人も異るのがふつうだろうから，聞く人はしつ

こいとは感じないのではないか。型通りと受け取ることはあるにしても。むしろ報道などで発言を追っている方が，繰り返しに敏感になるのではないか。ただ実際に発言の場に居ると，苛立ちを覚えることがあるのかも知れないが，それは想像の域を出ないので，なんとも判断の下しようがない。

ところで引用したように，二階堂進，園田天光光，平山郁夫をはじめとして，村山富市や各党の指導者たちも政治認識に言及している。こういう事実も江沢民のしつこさの印象をやわらげる役割を果たしているのかも知れない。もちろん最大の原因は，過去の歴史についての日本の責任の取り方（責任を取らないこと）に忸怩たることで，言及を当然視する思いが反発する気持ちよりもまだ強いということだろう。たとえば，やはり先に引用したが，共同宣言も，中曽根元首相も，1995年8月15日の村山首相の談話を持ち出している。そして小淵首相もこの談話を持ち出している。この談話で日本の過去の植民地支配と侵略について深く反省し心からのおわびを表明したことを指摘するのである。

けれどもこの談話に先立つ6月9日の衆議院本会議における「歴史を教訓に平和への決意を新たにする決議」，いわゆる「戦後50年国会決議」の内容と採決の状況の無様なことを思い出すと，実力はないながらもその地位にたよってかろうじて行なったという印象を拭えない村山首相の談話を，今さら錦の御旗のように持ち出すことにはどうしても納得がゆかない。また近頃，「中国は言わず，日本は忘れず」という類の表現が用いられるようだ。もちろん「歴史」について言うのである。この表現は中国側から言うのならともかく，日本側が口に出すのは憚られるのではないか。「忘れず」の実行は大きな困難を伴うのであり，日本の現状は好ましいものとはほど遠いのだから。この辺りのさまざまな事柄も歴史認識の言及に対する反応に関わってゆくのだろう。

小学校歴史教科書の記述

一般的には歴史認識は歴史教育に影響されると推測されるだろう。それがどの程度に真実であるかは別にして。また実際に影響関係が認識されても，その強度が次に問題になるだろう。それはともかくとして，ここでは

中国の小学校の歴史教科書[7]の記述を検討してみよう。拙論で扱っている歴史認識は日本の戦争責任に関連するので，「甲午中日戦争」「抗日戦争の勃発」「抗日戦争の勝利」の三つの課を取りあげる。小学生用であるから，記述はもちろんいたって簡略である。

まず「甲午中日戦争」，つまり日清戦争の課文を見る。

出だしは「1894年，日本はわが国に対して侵略戦争を起こした」である。この課は「黄海大戦」と「清朝政府が投降し国を売る」の二項目から成る。「黄海大戦」では致遠艦の艦長鄧世昌が，傾きかけた致遠艦で日本の主力艦に体当りしようとして沈没した，命を惜しまない行為を賛え，そのあとの「言ってみよう」という名の設問で，「われわれは鄧世昌が祖国に身を捧げた愛国精神をどのように学ぶべきか」と問いかけて，答えさせる実習がある。

「清朝政府が投降し国を売る」には，「日本侵略軍が……陸海両路から中国に侵入した」「日本侵略軍は不断に侵略範囲を拡大し……わが国の……広大な領土をあいついで占領した」「日本の代表は横暴にいわゆる『和議』条項を憶面もなく持ち出し，清朝政府の代表に署名するよう脅迫した」「国権を失い国辱的な中日『馬関条約』（下関条約）」「台湾，澎湖列島等を日本に割譲」「中国を国家民族の滅亡の危機に直面させた」などの表現が見られる。そして「言ってみよう」では，「『馬関条約』締結後，わが国のどこの領土が日本に占領されたか」という問いに答えさせている。

なお，この課には，「中国の多くの将兵が英雄的に戦い，日本軍の進攻に反撃する」という説明のある海戦の絵と，国に殉じた鄧世昌の肖像が添えられている。

つぎに「抗日戦争の勃発」の課文に移る。

この課は「全国の抗日救亡の高まり」と「蘆溝橋事変」の二項目で構成されている。「全国の抗日救亡の高まり」は，「長期にわたって，日本帝国主義は中国に対して野心を抱き，まず中国の東北を占領し，その後さらに全中国をしだいに併呑し，中国をその植民地に変えようと計画していた」と書き始められている。そして「日本侵略軍は中国東北軍に進攻し，瀋陽を砲撃した」「中国東北三省は日本帝国主義の鉄蹄の下に滅亡した」「日本帝国主義はさらに中国華北の広大な土地を侵略し，北平（北京），天津を脅

やかした」という表現が見られる。

この後は「読んでみよう」という欄をはさんで，後半では中国共産党の提唱によって「全国人民が抗日救亡の新たな高まりを起こした」と言って，西安事変をやや詳しく説明して，これによって「抗日民族統一戦線が初歩的に形成された」と結んでいる。

「読んでみよう」では，「日本の侵略者の蹂躙に耐え切れず，関内（山海関以南の地）に逃げ込んだ」東北の民衆の心情を歌い，「また全国人民の抗日救亡の闘志を激発させ，当時広く流行した」，歌曲『松花江のほとり』の歌詞を紹介している。「『九一八』，『九一八』[8]，あの悲惨な時から，私は故郷を逃がれた」「何年何月になったら，私は愛する故郷に戻れるのだろう」という具合に，家族が残り，資源も豊かな故郷，東北の松花江の家を懐しむ歌詞である。

なお，「日本軍が瀋陽の城壁から中国東北軍に攻撃する」写真と，「1935年12月9日，北平の学生が抗日救国のデモを行なう」写真，それに西安事変の立役者である張学良と楊虎城の肖像が挿入されている。

「蘆溝橋事変」では，「日本帝国主義はわが国への侵略を強め」「しきりに挑発的な軍事演習を行ない」「日本侵略軍はすでに三面から北平を包囲していた」「日本側は演習に参加した日本軍の兵士が失踪したとでたらめを言って」「この理不尽な要求」「日本軍は口実を設けて大軍を移動集中させ」「中国の守備軍二十九軍の将兵はついに我慢しきれず，奮起反撃した」といった表現が見られる。そして最後にはこう言っている。「この後，日本帝国主義は大規模な対中国侵略戦争を起こし，わが国は全民族の抗日戦争を始めた。」

「言ってみよう」は設問が二つある。「1．西安事変はなぜ起きたのか。どのように解決したのか」「2．なぜ蘆溝橋事変はわが国の全民族の対日戦争の始りだと言うのか」である。

この項目には二枚の写真が示されている。「蘆溝橋と宛平城」と「中国守備軍が蘆溝橋上で奮起し抵抗する」の二枚である。

「抗日戦争の勝利」の課には，「中国軍隊の抗戦」と「敵陣後方の抗戦」の二つの項目がある。この項目に入る前の部分で，『義勇軍行進曲』が日本の侵略者と戦う中国人民を激励し，新中国の国歌になったと言い，この歌

を歌えるかと問うている。それに続けて，日本帝国主義が工業力と軍事力が中国にはるかにまさっていることをたのんで，三カ月で中国を滅そうと企てたと言っている。

「中国軍隊の抗戦」では，「日本侵略軍は北平，天津を占領」「日本軍の行く所では，人民を惨殺し，財物を略奪し，婦女を強姦し，家屋を焼き払った」と書かれ，上海で中国軍が日本軍に大打撃を与えたあと，「日本軍は……残酷非道な南京大虐殺を起こした」と書いている。

南京大虐殺は今だに一部の日本人の発言が物議をかもす問題でもあるので，このあとに続く「読んでみよう」を全文訳出しておこう。「日本軍は南京を占領すると，なんと公然と五週間にもわたる血腥い大虐殺を行なった。日本の侵略軍は百千の軍民を縛りあげ，機銃掃射し，生き埋めさえし，さらに南京城内で人を殺して楽しみ，殺人競争をした。南京大虐殺では，30余万の中国人民が無惨に殺戮された。日本侵略軍は中国で極悪非道の罪を犯した！」

これに続く課文は，台児荘で日本軍を撃破した話である。そして「読んでみよう」では，台児荘の中国の守備部隊の勇敢さを讃えている。また，日本軍が毒ガスを放ったと書いている。中国軍の決死隊員が「民族の生存を勝ち取り，人類の光明を勝ち取るため」だからと言って賞金を受けとらず，「戦闘の目的はわれわれと子孫が日本帝国主義の奴隷にならないことを保証するため」と言う。

しかしこのあとの課文では，この勝利が「中国軍民の抗日の士気を鼓舞」したが，日本侵略軍が反撃し，華北華中を占領したと述べる。

「敵陣後方の抗戦」では，「日本軍は抗日根拠地に残酷な『掃蕩』を行なった」と言っている。そして八路軍が日本軍を破った百団大戦を詳述している。このあとの「読んでみよう」は百団大戦の際の八路軍の武勇談である。

このあと課文では日本軍と傀儡軍四万人余を殲滅，捕虜にし，抗戦勝利の信念を鼓舞したと言い，共産党の指導で中国人民が八年の困難な抗戦を経て，日本帝国主義を打ち破ったとする。

最後に「活動」という実習課題がある。この課の課題は「少年先鋒隊会といっしょに，短い抗日英雄物語を書いて，壁新聞を編集しよう」というものである。

この課には写真が四枚と地図が一枚挿入されている。「中国軍が上海で日本軍に抵抗する」「日本軍が南京の青年を惨殺する」「彭徳懐が前線で作戦を指揮する」「八路軍が敵のトーチカを攻め落とす」の四枚の写真と，「台児荘戦役の形勢示意図」である。

以上のように小学校の歴史教科書の三つの課の記述を検討してきたが，たしかに，要約することも困難なほどの簡略な記述の至る所に，日本の負の面が語られていることが理解できる。もちろん，日本が中国に侵略した時期のみ取り上げたのだから，しかもその性格から言って，大筋の骨格のみの記述にならざるをえない小学校の教課書なのだから，日本が侵略したと言う言葉しか残らないのは当然でもあろう。

けれども，非常に明確で直截的な表現で語られていることには留意すべきであろう。侵略，横暴，国家民族の滅亡，三カ月で中国を滅亡させる，惨殺，略奪，強姦，大虐殺などの語句からは，そして南京大虐殺の具体的な説明からは，日本（人）の負の側面のみが強烈に印象づけられることになる可能性があるだろう。先にも言ったように，この場面ではやむをえないことなのだが。また設問の内容も当時の日本の性格を印象づけるのに効果的であると思う。抗日英雄物語を書かせる実習はすばらしく卓越した課題であるにちがいない。用いられている写真もこういう印象を強めるのに役立つものばかりだ。ことに，よく知られている，後ろ手に縛られて跪く中国人青年の首を切ろうとして日本刀を振り上げている日本兵の写真は，強烈な印象を刻み込むであろう。

そうではあるが，このように記述されている教科書で学ぶことがすぐにそのまま日本への反感につながると考えるならば，それはあまりに短絡的であろう。ふつうに常識的であるならば，過去と現在の区別は自然になされるだろう。まして，最近は家庭電器製品などは中国産の伸びが著しくなっているが，たとえば日本の工業製品の評価は今も高いはずだし，中国人の抱く日本（人）の印象はそんなに一面的単純なものではないからだ。ただ過去の歴史的事実として認識する可能性は十分にある。江沢民の強調する歴史認識である。

過去と現在は平穏な正常な環境にあってはそれぞれを区別して混同が起

きない。環境が動揺すれば混同が起きうる。そのときに過去は今さら遡って変えることはできないから，変わるのは現在である。けれども現在は過去から結果してきたものだから，過去と無関係ではありえない。したがって現在は常に過去を意識，記憶しつつ成り立っている。歴史認識抜きの現在認識は有りえないわけだ。

歴史認識の差小結

中国（人）と日本（人）に歴史認識の差があるのは当然のことであるし，実際に差は存在している。しかし差の存在と，反感・好感，敵意・好意，悪意・善意，敵対・友好などとは次元の違う問題である。その差から教えられ気付かされることは多いし，双方がその差から学び合うことが緊要なことは言うまでもないことであろう。そういう例をいくつかあげてみよう。

尚会鵬[9]は，沖縄の姫百合の塔の前で人々が黙祷を捧げることに納得がいかない。日本人は彼女らの英雄的行為に敬服したり，命の絶ち方を讃えたり，忠義だてを憐れむと尚は推測する。しかし，悪名高い侵略戦争のために死に，実際上は日本軍が中国人やアジア人を殺すのを助けた。罪人ではなくとも義士，英雄ではない。不義の戦いで死ぬのは敬服に値いしない。追求した目標，忠誠の対象が誤りだったのだから，自殺で辱を濯ぐのは賞賛できない。「大東亜戦争」という美名に騙されたのは憐れであるが，後世の人は教訓を汲み取るべきで，献花，敬服は必要ない。尚はこう指摘する。感情を逆撫でされたように思う人もいるかも知れないが，視点を移して考えれば，これはまた至極もっともな意見なのである。尚は靖国神社も同様の例であるとする。多くの日本人はこの問題に対していいかげんで，善悪を分けずに，死ぬとみな神にしてしまうと批判する。

『それでもノーと言える中国』[10]には次のような箇所がある。

「われわれはつねづね，学校の先生から，日本の軍国主義は悪人だが，日本の人々は善良で，彼らもまた被害者なのだ，と教わってきた。これは中華民族の美徳である。けれども，もし日本の民衆のなかにあのように熱狂的な武士道精神がなかったなら，彼らは熱狂的な軍国主義思想に支配され

ることもなかったろう。あるいは，たとえ侵略者の隊列に入ってしまったにせよ，中国において，その銃口を軍隊に向けるのならまだしも，何の武器も持たない一般人を殺しはしなかっただろう。それならば，われわれの憎しみと恥辱に満ちた心も少しは慰められたかもしれない。

（中略）

もし，われわれが日本人戦犯を拘留し，おのれの罪を深く反省させ，かつ自分の悪事を書き出させ，マスコミに公表していたなら，さすがに彼らも日本の政界に再登場したり，公然と歴史を改竄したり，日本軍国主義が中国を侵略したという犯罪の事実を否定したり，靖国神社に参拝したりまではしなかったろう。

われわれは間違っていたのかもしれない。いや，おそらくは，取り返しがつかないほどに間違っていたのだ。人に対してなら人の道を施すこともできる。だが，獣に対しては獣の道を実行するしかないのだ。」

軍国主義者と一般民衆の区別は，早稲田大学での江沢民の講演では毛沢東の教えとして類似の言葉が使われたし，江沢民の他の発言にも，この主旨に基く言及がしばしばあるように，中国の公式の見解だが，このように区別されたことは日本（人）にとってある意味で不幸だったのかもしれない。自覚を強制されることがなかったからである。中国ももちろん善意のみではなく，国共対立，冷戦構造の中で選択した政策であった。冷戦構造の「恩恵」にもっとも浴したのは日本ではないだろうか。引用の後段は耳に逆らう言葉ではあっても，反論はしにくかろう。

歴史認識の差が一部の過激（？）な人々との間にだけ存在するわけではなくて，中国人一般との間に存在するのだということを確認するために，大森和夫編，『中国の学生は主張する』[11] を見てみよう。この本は日中平和友好条約締結二十周年に実施された「第六回・中国の大学生，日本語作文コンクール」（テーマ・「日中友好を深めるにはどうすれば良いか」）への，中国の73大学933人の日本語を学ぶ学生の応募作から入賞70篇を収めてある。大森の「まえがき」から引用する。

九百人を超える中国の大学生の驚くほど上手な「日本語の作文」を読んで，「戦前の旧日本軍の『侵略行為』が，二十代前半の中国の若者の心に鋭く突き刺さっている」という歴史の重さを改めて痛感した。約三百

編が「日中戦争」に触れ，「日本政府と日本人は，『南京大虐殺』などの歴史的事実を，正面から受け止め，反省してほしい」「日本の若者は日本が中国で何をしたかを知らない」と訴える。

祖父母や親族が「日中戦争」の直接の犠牲者だったり，両親にそうした話を聞かされたりして，あるいは，学校の勉強を通じて，中国の大学生の多くが，小さいころから「反日感情」を抱いている。そうした体験から彼らは「靖国神社公式参拝」や「歴史教科書の記述」などにも反発する。

誤解があるといけないが，応募した学生たちは日本語を学び日本人教師と出会って，日本を理解し，日本に対する見方を変え，日中友好を願う学生たちである。作文は日本を非難するのではなく日中友好をめざすものなのである。各作文には二行の印象的な部分の抜粋が付けられているのでいくつか引用してみる。

……。「私は絶対に日本人を許さない！」と心の中でつぶやいていた。……歴史を振り返りながら，前向きに進んでいく。そのために私たちは何かをしなければならない。

……。「南京記念館」へ行きました。……「三十万」という巨大な数字が……。心の底でずっと「……私はなぜ日本語を勉強しているのだろう」と叫んでいました。

「友好」というと，「不愉快な過去を水に流そう，戦争を忘れよう」と多くの人は主張している。しかし，私はどうも賛成できない。

……祖父のように今も日本人を憎んでいる人達に，中国人のために何かをしようとする日本人がいることを知らせたい。

大学入試で日本語科に組み入れられた時はとても驚きました。……日本人は何といやで残酷なんだという印象が強かったからだ。

これらの学生の言葉を読むと，歴史認識の差は必ず解消できる，あるいは差を残して理解し合えるという確信を強められるのである。

（注）

(1) 『蒼蒼』第84号所収。1999年2月10日発行。蒼蒼社。

(2) 注(1)に同じ。

(3) 以下の『人民日報』の記事は，http://www.snweb.com/gb/people-daily によって検索したものによる。

(4) 前出の高井潔司の文章からこの記者は高井本人であることが分かる。この質問と回答は内容に多少の違いはあるが高井の文章にも記録されている。

(5) 高井潔司の前出の文章では「侵略を美化し」になっている。（傍点筆者）

(6) 『朝日新聞』 1998年11月28日朝刊。

(7) 人民教育出版社地理社会室編著『九年義務教育五年制小学教科書　社会　第四冊』人民教育出版社出版　遼海出版社重印　遼寧省新華書店発行　1996年4月第一版　1998年10月遼寧第3次印刷。

(8) 満州事変を中国では九一八事変と呼ぶ。

(9) 尚会鵬著『認識日本人』（重慶出版社，1997年）に依る。

(10) 宋強・張蔵蔵・湯正宇・古清生・喬辺著。　莫邦富・鈴木かおり他訳。日本経済出版社。1997年。

(11) スリーエーネットワーク。1998年。